

## 親鸞聖人の假名遣に就て

(阪東本教行信證の假名遣を主として)

藤 谷 一 海

曩に私は親鸞聖人の假名もの、聖教に就て検討してそこに略々聖人のそれらに於ける假名遣を明にすることを得た。(大谷學報第十三ノ三) 然るに今一つこゝに御草稿本即ち阪東本『教行信證』の嚴存することを忘れてはならない。

云ふまでもなくこの御草稿本は聖人五十二歳稻田の御草庵に於てお認めになつたと云ふことになつてゐるが、假名聖教の多くが聖人の御歸洛後、極く御晩年にお認めになつたものなるに反して、之はそれらより約三十年以前の製作にかゝるものである。即ちそれら假名聖教の中自分の拜見したものは、建長二年十月十六日七十八歳の奥書のある南部本誓寺本『唯信鈔文意』が最も時代の早いものであつて、その他はみな八十三歳、四歳、五歳、六歳頃にお認めになつたものばかりであるが、それら極く御晩年のものと、この阪東本『教行信證』とを比較してそこに假名遣上何等か相違がありはしなかつたか、若し又この兩者の間に一貫して共通なものがあるならば、それを以て聖人の假名遣と決しても何らそこに差支はないと思ふのである。

會て吉澤博士は聖人が康元元年から翌二年春にかけて寫された『西方指南鈔』の中に朱筆もて助辭のヲバヲゾ

ヲヤ等をオバ オゾ オヤ等ア行のオに訂正してゐられることから宗祖が假名遣と云ふものに注意せられるやうになつたのは康元元年の末、即ち八十四歳以後のことであると斯う斷定せられたのであるが、その後私は聖人七十八歳にてお認め『唯信鈔文意』を拜見して、それに一樣にヲバ ヲヅ ヲヤ等がア行のオを用ゐてあることを知つて、聖人の假名遣に御注意なさつたのは、それよりも以前、今の七十八歳頃にすでに或るものは一定してゐたことを知つた。然るに今や御草稿本教行信證を拜見するに至つて、この助辭のヲバ ヲヅ ヲカ ヲヤ等が略々一定してオバ オゾ オカ オヤ等用ゐてあることを見るに及んですでに早く五十二歳以前からもそれらのものは一定して用ゐられてゐたことを知つたのである。

註(一) 吉澤博士「親鸞聖人の寫語法」(大正一一・一〇龍大論叢)

支那との交通の結果は奈良朝平安朝にかけて我國でも盛に漢文が行はれたが、その後漸く國文の隆盛を來たし、假名文の用ゐられるやうになつて、漢文體のものも漸次その影響をうけて遂には和漢混淆文の胎生をみるのであるが、それまでに到らぬものでも漸次國文の色彩をとり入れて、外見は漢字を以てかゝれた一見漢文であるが、その實著しく國文へと歩みを寄せて來たものが、かの聖人の『教行信證』の如きものである。その用語例を見るに、例へば、名をミナと訓ませたり、在をオハスと訓ませたり、回向と云ふのを回向と敬語に訓ませたり、或は有をマシマス、將をキテマシマス、向をムカヘシメタマフナリと送り假名したり(この例多し)更に甚しきは斯うした一言一句のものに止らず、國語を寫すに唯漢字を以てしたと云ふより外には全く漢文の文法的には解釋の出來ないやうな個所もないではない。

これはこの時代の一の特色であつて他にこの種のを求むれば、多少その内容を異にしてはゐるが鎌倉幕府の日記として當時の武士階級の日常を記した『吾妻鏡』や九條兼實の『玉葉』などもこの種のグループへ入ることであらうし、廣く云へば鎌倉時代の漢文は、その一部のものを除いては多少なりともこの傾向をもつてゐないものは無いと云つても過言ではあるまい。

故に單に漢文の文法と解釋法さへ學べばこの時代のかゝる種類のものが解釋出來ると思ふも間違なれば、單に國文さへやればかうした文體が讀み解けると思ふのも亦間違である。無論嚴密に云へば言葉とか假名遣とか云ふものは個人々々によつて多少異にしてゐるもの故、それまで注意の中へ入れて置かねばならぬが、それと共に大體的には先づその著書の背景となるべき時代と云ふものを判きり考へて置かねばならぬ。例へば

諸有情類聞我名已所有善根心々廻向 (信卷左)

諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心廻向 (信卷右)

能發二念淨信歡喜愛樂所有善根廻向 (同右)

等のセシムの用語の如きもその一つであらう。これらシメシムの用法が判きりしなくてはこゝが十分解釋してゆけないのみならず、隨つて眞宗教義の中心生命をなす廻向の思想の上にも動もすれば異様な解釋を施し、延いては一宗安心の上に異解を生ずるやうな事にならぬにも限らぬ。

香月院の『廣文類會讀記』卷十、一〇一には「心心廻向」に就て説明してあるが、教主世尊ニマフサシムのシムも一筆啓上セシメ候のシメもツネニ念佛セシムレバのシムも、心々廻向のシムも皆一樣の例に説明してある。本文の

義は略々あらはれてゐるが、そのシメ シムの説明は行き届いてゐないと思ふ。これに就ては拙稿「三帖和讃に於ける教語助動詞シムに就て」(本誌第四卷第四號)を参照ありたし。

斯くて假名遣に於ても平安末期からこの鎌倉時代へかけては最も歴史的假名遣から遠ざかつて混亂の多い時である。さうした時代にあつての聖人の御著述の上に假名の混亂のあることに何ら不思議はない。

『教行信證』の假名遣に於て最も目立つものは、假名聖教の場合と同じく、

「ハ」と「ワ」との関係

「イ」と「ヒ」と「井」との関係

「ウ」と「フ」との関係

「エ」と「ヘ」と「エ」との関係

「オ」と「ホ」と「ヲ」との関係

等である。

今それらの大要を述べると、五十音十行中最も混用されたものは「ハ」行であるが、その中語間及び「語尾」の「ハ」及び「ホ」は「ワ」行に混して「ワ」及び「ヲ」となり、語の中尾の「ヒ」と「フ」「ヘ」は多く「ア」行の「イ」「ウ」「エ」に混用せられてゐる。又その中「ヒ」「ヘ」は「ワ」行に混じて「キ」「エ」ともなつてゐる。

これらの事から當時すでに發音上語の中尾に於ては「ハ」と「ワ」との區別、「イ」と「ヒ」と「キ」との區別「オ」と「ホ」と「ヲ」との區別がなく、又一般の場合、現今の如く「キ」は「イ」に、「エ」は「ア」に、「ヲ」は「オ」に發音せられた、

親鸞上人の假名遣に就て(藤谷一海)

とが略々推測せられるのである。

諸て然らば果してこの阪東本の假名遣と先に調査したる御晩年の假名聖教の假名遣との間に異同ありやを究明して兩者を一貫する聖人の假名遣を明にしたい。

これら假名遣の研究は今後聖人の語法研究、その他の上にも重用なる一要素となるが、その假名遣を以て今日行はれてゐる會本『教行信證』や『眞宗假名聖教』、『眞宗法要』等に比較するとき、いかにそれらに後人の手が多く加はり、聖人の假名遣から遠ざかつてゐるか知られるであらう。

次に引用する用例の下に括弧内の數字一——六は大正十二年、立教開宗七百年記念に大谷派本願寺より上版せられたる阪東本の玻璃版冊數番號であつて該書の冊數番號は、

一 教行、二 信、三 證、四 眞佛土、五 化身土本、六 化身土末

の順序である。本年四月法藏館より之が複製上版せられたるものには全二冊本と全四冊本とあるが何れもその内容は各卷に別れてゐるので、右本願寺版に準じて参照されるならば判ることと思ふ。

尙この阪東本の振假名及び左調の中には聖人以外、後日他人の手の加へられたりと覺しきものがある。闌如上人傳燈紀念として東本願寺待董寮より出版の活字本は右阪東本の原形を出來得る限り止めたるものにして、かの振假名左調の如きも聖人の筆として疑はるべきものは之を平假名に書き別けられたるなど可成り權威的のものなれど、猶いかがと思ふ點もあれば自分は必ずしも、かの活字本のまゝにも依らない。

# (一)「ハ」と「ワ」との関係

一、語間語尾の「ハ」字の地位に「ワ」字を用ゐたるもの。

これは名詞動詞接續詞形容詞副詞等に多くその用例を見る。そのうち、  
名詞にあらはれたるもの。

カタハラ(傍)

○正助二業中猶謗於助業(一ノ五三右)

サハリ(障守)

○一切無<sup>シサワリ</sup>守<sup>△</sup>(二ノ二三右)

アヂハヒ(味)

○滋味不<sup>シミルカ</sup>斷<sup>コト</sup>諸佛種<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>(一ノ九左)

○清淨香<sup>ゲトニシアアチクイシト</sup>潔<sup>△</sup>味<sup>△</sup>如<sup>ニ</sup>甘露<sup>ノ</sup>(五ノ三左)

ナリハヒ(業)

○遇<sup>フ</sup>斯<sup>ノ</sup>光<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>業<sup>ハ</sup>繫<sup>ナリクイツナク</sup>除<sup>コル</sup>(四ノ三二左)

イツハリ(虚、僞、驕)

親鸞上人の假名遣に就て(藤谷一海)

## 大谷學報 第十七卷 第三號

○信ズルキヨウ矯ハツ 盲ハツ者之言耳ノノヲミト (六ノ三一左)

キハイツワリ (際) メシヒ

○十方六道同シクシ此輪回シクシ無際キリ (五ノ三八右)

動詞にあらはれたるもの。

(イ) 四段活用その他動詞にあらはれたるもの。

アハレムレシテ (憐、矜、哀)

○是以大聖悲憐レシテ (一ノ二六右)

○如來悲憐シテ苦惱ノ群生シテ海シテ (二ノ二四左)

○如來矜哀シテ 一切苦惱シテ群生シテ海シテ (二ノ三〇左)

アラハスオホキニアワシム (標)

○此乃玄談ニシテ 未ス標得處ニシテ (二ノ四八右)

但し之が『化卷』には「徵」字にアラハスと訓じて即ち、

○徵字チ反 アラハス反 (六ノ四八左)

とある。

オホハルオホハル (覆―受動)

○常爲ニ無量煩悩ノ所ニ覆オホハル (四ノ八左)

ミツナハス(観、觀、視、見)

○諸佛世尊眼見<sup>ミツナハス</sup>佛性<sup>ミツナハス</sup> (四ノ一八左)

但し之には、

○六通自在觀<sup>ミツナハス</sup>機<sup>ハシ</sup>可度者<sup>ヤ</sup> (三ノ七左)

○慈眼<sup>ミツナハス</sup>視<sup>ミツナハス</sup>衆生<sup>ミツナハス</sup> (一ノ四四右)

の例もある。

クルハス(狂、著)

○人<sup>クルワレテ</sup>著<sup>クルワレテ</sup>鬼魅<sup>ミ</sup> (二ノ七三右)

(ロ) 四段活用の自動詞にあらはれたるもの。

イツハル(僞、詐)

○皆是<sup>イツワリ</sup>虛僞<sup>イツワリ</sup> (一ノ二〇左)

○人天<sup>イツワリ</sup>虛僞<sup>イツワリ</sup>邪<sup>イツワリ</sup>偽<sup>イツワリ</sup>善業<sup>イツワリ</sup> (二ノ五五右)

○言<sup>イツワリ</sup>群<sup>イツワリ</sup>賊<sup>イツワリ</sup>惡<sup>イツワリ</sup>獸<sup>イツワリ</sup>詐<sup>イツワリ</sup>親<sup>イツワリ</sup>者<sup>イツワリ</sup> (二ノ一五左)

○知<sup>イツワリ</sup>者<sup>イツワリ</sup>了<sup>イツワリ</sup>達<sup>イツワリ</sup>乃<sup>イツワリ</sup>知<sup>イツワリ</sup>其<sup>イツワリ</sup>虛<sup>イツワリ</sup> 詐<sup>イツワリ</sup> (二ノ六九右)

マジハル(間、雜、參)

親戀上人の假名遣に就て(藤谷一海)



○參禪見性<sup>マシワリニルコトヲ</sup> (二ノ五〇左)

○一時煩惱百千<sup>モ、タヒナタヒマナリル</sup> 間<sup>△</sup> (五ノ一八右)

サハル(關)

○三自在所聞無關<sup>ハハケトリ</sup> (二ノ一〇左)

ヲハル(畢)

○此所見事畢竟無所<sup>シテクムユルコトアラ</sup> 有<sup>△</sup> (二ノ一九右)

マツハル(纏)<sup>ナリル</sup>

○頽字<sup>タイ反</sup> 崩也<sup>タフル</sup> 破也<sup>ユツル</sup> 落也<sup>マツル</sup> 纏也<sup>△</sup> (四ノ四五右頭註)

ツタハル(傳)

○傳乎<sup>ツタワリテ</sup> 漢明之世<sup>△</sup> (六ノ三四右)

(ハ) 下二段の他動詞にあらはれたるもの。

キハム(躬、窮、竟、究)

○從因<sup>タツリ</sup> 建願<sup>タツテ</sup> 秉志<sup>チキソメ</sup> 躬行<sup>△</sup> (一ノ四〇左)

○此道窮理<sup>キワミテ</sup> 盡性<sup>コトヲ</sup> (二ノ五〇左)

○彌勒大士窮等覺金剛心故 (二ノ五〇右)

○莫窮遠邇 (六ノ三七左)

○皆悉究竟無上菩提 (三ノ二左)

タクハフ(蓄)

○憐愍衆生皆聽音 (五ノ五一右)

(ニ) 下段の自動二詞にあらはれたるもの。

アラハル(彰)

○十地願行自然彰 (二ノ四七左)

しかしこの書にては多くはアラハルなり。

タハフル

○遊戯神通 (三ノ六左)

トラハル(囚)

○君臣悉囚於吳 (六ノ四一左)

以上名詞の語間、語尾及び動詞の語間の「ハ」の地位に「ワ」字を用ゐた例である。勿論これら上に舉げた語は何れの場合でも斯の如く用ゐられてゐると云ふのではない。斯の如き用例があると云ふまでなり。

親鸞上人の假名遣に就て(藤谷一海)

次に形容詞にあらはれたるもの。

コハシ(強)

○當<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>本願最爲<sup>ニ</sup>強<sup>△</sup> (二ノ四七左)

アツカハシ(蒸)

○雖<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>冬<sup>ニ</sup>藥<sup>ヲ</sup>塗<sup>リ</sup>治<sup>ス</sup>癰<sup>ヰ</sup>瘡<sup>ヲ</sup>瘡<sup>ヲ</sup>蒸<sup>ス</sup> (二ノ六一左)

クワシ(委)

○是<sup>ニ</sup>義<sup>ヲ</sup>觀<sup>ス</sup>一異門論中委曲<sup>ニ</sup> (二ノ一九左)

副詞にあらはれたるもの。

ミダリカハシク(猥)

○猥<sup>ニ</sup>坐<sup>ス</sup>死罪<sup>ニ</sup> (六ノ四六左)

イハマク(言)

○白<sup>ニ</sup>王<sup>ニ</sup>言<sup>フ</sup>者婆<sup>ニ</sup> (二ノ六三左)

但し又「王言者婆(二ノ六四右)と云ふ例もある。次に、

接續詞にあらはれたるもの。

スナハチ(即、乃、則、尋、輒)

○云何菩提者乃是無上佛道之名也 (二ノ四六左)

○坐時<sup>ノニ</sup>乃<sup>スナワチ</sup>斬<sup>ヤル</sup>猶<sup>トモ</sup>不得<sup>シ</sup>罪<sup>ヰ</sup> (二ノ六六右)

○尋<sup>スナ</sup>自<sup>ミ</sup>念<sup>ナ</sup>言<sup>ハク</sup> (二ノ五二左)

○令<sup>ミタマフ</sup>其<sup>ヲ</sup>重<sup>チシテ</sup>罪<sup>スナワチ</sup>尋<sup>ミ</sup>得<sup>テ</sup>微<sup>コ</sup>薄<sup>トル</sup> (二ノ六一右)

○提<sup>スナワチ</sup>婆<sup>ノ</sup>達<sup>ニ</sup>多<sup>ニ</sup>尋<sup>ミ</sup>時<sup>トキ</sup>躋<sup>ニ</sup>地<sup>ニ</sup> (二ノ七六右)

○輒<sup>スナワチ</sup>內<sup>ニ</sup>彼<sup>レ</sup>獄<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>擊<sup>ツ</sup>以<sup>テ</sup>金<sup>ニ</sup>鎖<sup>セム</sup> (五ノ四右)

○惡<sup>レハ</sup>龍<sup>スナワチ</sup>有<sup>テ</sup>力<sup>カ</sup>則<sup>ニ</sup>降<sup>ル</sup>霜<sup>シヤウ</sup>苞<sup>ヘウ</sup> (六ノ四〇右)

このスナハチの用例を拾はゞ尙この他に多數を拾ふことが能きるが殆どこれには例外なく一様にスナワチであることは假名聖教に於ける場合と全く同様である。但だ一つ例外として、「速<sup>カニトク</sup>疾<sup>テスナハチ</sup>超<sup>ル</sup>便<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>至<sup>ル</sup>安樂國之世界<sup>ニ</sup>」(二ノ五左)と云ふのがある。

以上、語間及び語尾の「ハ」字の地位に「ワ」字を用ゐた例であるが、この反對に、ニ、「ワ」字の地位に「ハ」字を用ゐた例。

もあり得べき筈なるが、これはコトワリ(理處)コトワル(斷)等、その語數も極めて僅かであつて、右の語もこの書では正しくコトワリと用ゐてある。假名もの聖教には一つ、

○一生補處<sup>ニ</sup>イタルナリ

トコロ反。コリハリ反 (淨談左訓)

親鸞上人の假名遣に就て(藤谷一海)

と云ふのが見えてゐる。

假名聖教に於けると同様、この『教行信證』に於ても假名遣の最も混亂したるはこの「ハ」行であり、その中殊に「ア」列であり、語間語尾に於ける「ハ」と「ワ」との関係である。その語の種類に至つては上に挙げた位のものであるが、それらの語の同じ用例を拾ひ集めるならば可成り澤山に上る。

諸て然らばどうして斯くの如く假名遣が混用されて來たかと云ふに、曩に「假名聖教用語の研究」(大谷學報 十三ノ三)にも述べた如く、これ畢竟時代の影響である。平安朝の中期から亂れかけた假名遣は、この時代に至つて益々甚しく、藤原定家をして假名遣書を創らせねば息まぬ程に到つたのであらう。

斯く假名遣の亂れて來たと云ふことに就ては他に原因もあるであらうが、その第一は發音上の變化に依るものであらう。即ち上の場合に於ては「ハ」の發音が「ワ」の發音に漸く接近して來て習慣上假名は書き別けられても發音としては全く或る場合に於ける「ハ」は「ワ」との區別がなくなつてしまつたのである。即ち現今吾人が發音する如く、この時すでに

スナワチ キワマル アワレム サワリ アデワイ キワ カタワラ

等の如く發音してゐたものであらう。その發音をそのまゝ文字に寫したまでのことである。

上に挙げたる如き語は何れも之は轉呼音の例であるが、近畿殊に都に於てはすでにこの頃よりこれらの語が轉呼されてゐたことが知られる。然るに邊境に於ては後世までもこれらが轉呼されなかつたもので、九州、四國、中國の一部では今も尙スナハチと原音を存して呼ばれてゐるのである。

斯くの如く轉呼の語をそのまゝ文字に寫すことは此の後室町時代にも續いて行はれたるもので、それは時代の抄物とか法語又は歌謠の類に依りても判きり窺ひ知られる。

鎌倉時代に於けるこの事に就ては此の時代の他の同種の抄物、消息類及び物語ものなどに依りても知られるが、猶此の時代の假名遣書の代表作たる定家の假名遣及び行阿の假名遣に就て之を見るがよい。然らばそこに瞭然たるものがある。

定家が歿したのは仁治二年であるが、かの『拾遺愚草』の出來たのは建保四年の春であると云はれるから、従つて定家が親行にこの『愚草』の清書を託したのもこの年頃とすれば、これに縁つて親行が假名遣を編案して定家の認諾を得たと云ふ所謂『定家假名遣』も恐らくこの年に出來たものであらう。

然るにこれよりさき親鸞聖人が大師法然聖人の御遷化を聞き、上洛の歩を再び吾妻路に向け、漸くにして常陸稻田の草庵に落ちつき給ひしは、かの『定家假名遣』の出來たと思はれる建保四年の翌、建保五年正月であつた。而してこの教行信證御草稿本の出來上つたのはこれより八年を経た元仁元年であつたと云ふことにも吾人は注意せざるを得ないのである。即ちそれは『定家假名遣』とこの御草稿本とは僅かに八年を隔て、出來てゐると云ふことである。

『定家假名遣』に就ては、これが傳本比較は曾て述べた事であるから今こゝには省くとして、兎に角『定家假名遣』に於ては

一を 二お 三え 四ゑ 五ひ 六る 七い

親鸞上人の假名遣に就て(藤谷一海)

の七項を擧げてゐるのであるが、それが後『定家假名遣少々』に至つて更に之に『わ』の一項を加へ、後更に『行阿假名遣』に至つては、更に之に

「は」「わ」「は」「む」「う」「ふ」

の六項を加へ、且つその例の語數を増加してそれらの假名の甚だまぎれ易いことに注意してゐるのである。

これらに依つても知られる如く、定家より行阿へと假名遣は益々亂れて行つた時代である。親鸞聖人の『教行信證』と云ひ『假名聖教』と云ひ、實にかかる時代に生れたものである。こんな時代の影響が、これら聖人の書の上になつて無からう筈であらうか。

以上、これは單に「ハ」と「ワ」との關係に於てみたのであるが、獨りこれは「ハ」と「ワ」との關係に於てのみの現象ではない。次の「イ」「ヒ」「ヰ」「ヱ」「ヘ」「エ」等、五列にわたつて同じ理由のもとに同様の現象をみるのである。

## (二) 「イ」と「ヒ」と「ヰ」との關係

前項「ア」列に於ては「ハ」行は「ワ」行に混用せられて語間の「ハ」の地位には多く「ワ」行が混用せられてゐたが、こゝでは却つて「ハ」行「ワ」行共に「ア」行の方へ引きつけられて語間及び語尾の「ヒ」、語頭・語間語尾の「ヰ」は「イ」となつてゐる。之全く音便上の變化に依るものである。

一、語尾の「ヒ」字の地位に「イ」字を用ゐたるもの。

○服膺フクヨウシヤ 一升反

シタカイモチナル (一ノ一七左)

○遂能改變此林<sup>ウイニク シンデ</sup> (一ノ二二右)

○魔境 (一ノ四〇右)

○或生邊界或墮宮胎<sup>アルハシ ハタセハド</sup> (五ノ六右)

○縱盡千年壽<sup>イトモ ノノヲ</sup> (五ノ二〇左)

○衆禍皆轉<sup>ナズ</sup> (五ノ二六右)

○國起三災遂生地獄<sup>ニリ スト</sup> (五ノ四九右)

二、語尾の「キ」字の地位に「イ」を用ゐたるもの。

○人耽醉逆害其母<sup>タムスイシテ セム</sup> (二ノ六八右)

以上の用例でも判るやうに、語間及び語尾の「ヒ」「キ」はこの時早く「イ」と同音に發音せられたものである。さてこそかゝる混用を生じて來る。

尙この「イ」には音便上「ハ」行異刻から來たもの「カ」行同刻から來たものがある。即ち

○无<sup>ム</sup>能<sup>クシヤル</sup>遮<sup>ル</sup>鄣<sup>ニト</sup>也 (一ノ二四右)

親戀上人の假名遣に就て(藤谷一海)



但しこの左訓少々墨色薄し。或は後より他人の方言もて記入したるものなるか。

四、「キ」字の地位に「イ」字を用ゐたもの。

○慶ヨロコハシイダ哉樹ヲ心弘ノ誓佛地ニ (六ノ四九右)

### (三) 「ウ」と「フ」との関係

「フ」字の地位に「ウ」字を用ゐたもの。

これは語尾にあらはれたるものしかない。

○若シ如ハ來ハ不ス加フ威ハ神ニ將ヲ何ニ以テ達ス乞ム加フ神ニ力ヲ (一ノ一七左)

○若ハ有ル嗽ニ其ハ華ニ菓ヲ發ス狂ニ (一ノ二二右)

○无キ狂ニ相ニ涅ニ槃ニ是ハ法ニ非ニ變ス化ニ (四ノ二九右)

○我ニ惡ニ當ニ報ニ如ニ是ハ大ニ惡ニ (二ノ七六左)

この事より語の中尾の「ウ」字の地位に「フ」字を用ゐた例もあつて然るべきであるが、その例は見當らない。

この他に、「フ」「ウ」が他語の中尾に於て他字の地位を占めたものがある。

イ、語の中尾の「ユ」字の地位に「フ」字を用ゐたもの。

○因ニ果ニ既ニ亡ニ形ニ名ニ頓ニ絶ニ也ニ (二ノ四三右)

## ○無能過絶 (一ノ敦)

ロ、語間の「ク」字の地位に「ウ」を用ゐたもの。

○含<sup>ノウミテ</sup>華<sup>ムスデ</sup>未<sup>ムスデ</sup>出<sup>ス</sup> (五ノ五左)

ハ、語の中尾の「ヒ」字の地位に「フ」字を用ゐたもの。

○及<sup>テ</sup>常<sup>ニ</sup>子<sup>シ</sup>有<sup>フ</sup>疾<sup>シ</sup> (六ノ三五右)

これと關聯した用例は高田本『唯信鈔文意』に、

## ○不淨說法ノモノヤマウノクルシミニヨリ

と云ふのがある。

ニ、「イ」字の地位に「ウ」字を用ゐたもの。

○内<sup>ウタイテ</sup>懷<sup>ムスデ</sup>虛假<sup>ムスデ</sup> (會本ト訓 點異ル) (二ノ七左)

これは古來、薔薇を宇波良と云つたこと、芋を宇毛と詠んだ歌ない和名鈔<sup>上</sup>廿四<sup>卷</sup>萬葉集<sup>六</sup>十等にも見えてゐるか  
ら強ち亂用とは云へない。然し又「心生重悔<sup>シテイタケリ</sup>而懷<sup>シテイタケリ</sup>慙愧<sup>シテイタケリ</sup>」(二ノ六〇右)と云ふ用例もある。

この最後の例はともかくも、前の「フ」と「ウ」との關係は全く音便上から來たるものであつて、即ち語の中尾の  
「フ」は「ウ」と同様に發音せられたるを知るべく、爲に假名遣の上にもかゝる用例を來たしたのである。

## (四)「エ」と「ハ」と「ヒ」との關係

親鸞聖人の假名遣に就て(藤谷一海)

一、「へ」字の地位に「エ」字を用ゐたもの。

○故婆蘇仙人唱言トナエテク（二ノ五八右）

○身壞命終必定墮シタテシテ無間地獄ムカンジコク（二ノ八六左）

○悉有シトヒ佛性煩惱覆故オモエルカニ（四ノ一八右）

○選要センヤウ法教ホフキョウ念彌陀ネンミダ（五ノ三〇左）

○攢サマシ濕木シツキ以求ヲモフ火ヒ（五ノ四一左）

この書には多くはオシへであつてラシエと用ゐた例は甚だ尠ない。假名聖教には幾種にも用ゐられてゐる。

二、「へ」字の地位に「エ」字を用ゐたもの。

○所以ソノヘニ玄籍ゲンセツ盈ミツ宇内ウチノ（五ノ四四右）

○老子楚之相人家イムトス溫水之陰オンスイノカミ（六ノ三五右）

三、「エ」字の地位に「へ」字を用ゐたもの、

○無能過絕ムネカワリ（一ノ教卷）

○紹隆ショウリウ三寶サンポウ常使ジョウシ不絕フツツ（三ノ一二左）

四、「エ」字の地位に「へ」字を用ゐたもの。

○常於諸佛種善根<sup>ニ</sup> (二ノ六六左)

○不種見佛善根<sup>人</sup> (五ノ四一右)

○今將別清淨出三種<sup>故</sup> (三ノ一五左)

○體用不二<sup>一</sup> 所以應知<sup>ニ</sup> (三ノ一六右)

この他、ユエをユへと用ゐるた例には、

○所以<sup>ニ</sup> (四ノ二一右) (六ノ三六左)

○所以<sup>ニ</sup> (四ノ二二右) (五ノ四四右) (六ノ三六右)

○故<sup>ニ</sup> (五ノ三六右)

○由<sup>ニ</sup> (五ノ三九左)

等、凡そ聖人の著書の上にユエと用ゐてあるものをまだ發見しない。等しくユへである。

五、「エ」字の地位に「エ」字を用ゐたもの。

○興<sup>ニ</sup>已<sup>ニ</sup>澁<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>木<sup>ニ</sup> (六ノ三七左)

右に依つて「エ」「へ」「エ」の關係を見るに「ア」「ハ」「ワ」の三行に亘つて全く混用されたるものにして、その中に何らの統一あるものとは思はれぬ。これも畢竟は發音上から來るものであつて、當時すでに「エ」「エ」及び語尾につく「へ」は同じくエと發音したるものゝ如く、この音を寫すに或る時はエ、或るときはエと寫し、甚しきはへを

以て一般の場合に代用したものであつて、そこに何ら深き注意が向けられず、無造作に用ゐられたものゝ如くである。この事は前に擧げたるかの「定家假名遣少々」や「人丸秘抄」に於て

へ え ゑ

が注意せられてゐることも知られる。

### (五) 「オ」と「ホ」と「ヲ」との関係

一、語の中尾の「ホ」字の地位に「オ」字を用ゐたもの。

○雖復調伏大衆勢亦不久<sup>△</sup> (二ノ七六右)

○一切衆生悉有佛性煩惱覆故<sup>△</sup> (四ノ一八右)

○覆蓋其上<sup>△</sup> (五ノ三右)

○若非善業者敬而遠之<sup>△</sup> (五ノ一二右)

○懺悔者徧身微熱<sup>△</sup> (五ノ一六左)

○九十五種外道競起<sup>△</sup> (五ノ四五右)

○炎ケムリナキホノオナリ<sup>△</sup> (二ノ一四右頭註)

二、語の中尾の「ホ」字の地位に「ヲ」字を用ゐたもの。

○遠<sup>トク</sup>慶<sup>ヨリシ</sup>宿緣<sup>ヲ</sup> (總序)

○競來欲殺此人<sup>キタヒテス ムト</sup> (二ノ一四右)

○焰<sup>ホノ</sup> ケムリアルナリ (二ノ一四右頭註)

○雖聞是語猶見瞻養<sup>セトノヲヲテ</sup> (二ノ五六右)

この語にナヲと用ゐたものは此書及び假名聖教を通じて恐らく此處位のものにして、其の場合殆どナホである。然るに覺師以後存師連師殆ど全くナヲと用ゐてある。

三、「ヲ」字の地位に「オ」字を用ゐたもの。

これに二様あり。語頭及び語尾に来るものと、或る特殊の助辭に来るものである。

1、語頭、語尾に来るもの。

○壽終皆令不復更<sup>オヘテ マタカヘラ</sup>惡道<sup>ニ</sup> (一ノ四右)

○畢此生平<sup>オヘテノ</sup>後入<sup>ヲ</sup>彼涅槃城<sup>ヲムト</sup> (三ノ六右)

○至誠專心歸<sup>ニ</sup>佛<sup>ニ</sup>已<sup>シタアマツリニ</sup> (六ノ六右)

○教稱<sup>オクヘテ</sup>南無無量壽佛<sup>ニ</sup> (二ノ八二左)

○臨喪扣<sup>テモニ</sup>盆<sup>タ、クホトキテ</sup>非華俗之訓<sup>オシヘニ</sup> (六ノ三六左)

○橫加逆害<sup>エス</sup>如魚處<sup>ヲ</sup>陸<sup>ニ</sup> (二ノ五九左)

親鸞聖人の假名遣に就て(藤谷一海)

2、助辭「ヲ」に「カ」「ヤ」「バ」等の助辭が重ねて用ゐられる場合に「ヲ」字の地位に「オ」を用ゐたもの。

(イ) 「ヲカ」の場合。

○何等<sup>オカ</sup>名爲<sup>テスル</sup>不<sup>ノ</sup>放<sup>ス</sup>逸<sup>ト</sup>者<sup>ト</sup> (二ノ六四左)

○何等<sup>オカ</sup>名爲<sup>テスル</sup>月<sup>スル</sup>愛<sup>ス</sup>三<sup>ス</sup>昧<sup>ト</sup> (二ノ六四左)

○四行<sup>シクカス</sup>以<sup>テ</sup>正<sup>スル</sup>綾<sup>ヲ</sup>之<sup>ノ</sup>何<sup>オカ</sup>者<sup>スル</sup> 爲<sup>ス</sup>四<sup>ト</sup> (三ノ二二左)

○何等<sup>オカ</sup>爲<sup>スル</sup>四<sup>ト</sup> (四ノ九右) (四ノ二二右)

○何等<sup>オカ</sup>爲<sup>スル</sup>三<sup>ト</sup> (五ノ一五右)

○誰<sup>オカ</sup>名<sup>ケム</sup>破<sup>ト</sup>戒<sup>ト</sup> (六ノ五〇右)

○何<sup>オカ</sup>者<sup>スル</sup> 名<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>有<sup>イウ</sup>六<sup>ト</sup>時<sup>ヤ</sup>也<sup>ト</sup> (六ノ二左)

(ロ) 「ヲヤ」の場合。

○如<sup>オヤ</sup>是<sup>ト</sup>死<sup>ス</sup>魔<sup>ト</sup> (二ノ七九右)

○何<sup>オヤ</sup>況<sup>ト</sup>無<sup>ス</sup>戒<sup>ト</sup> (五ノ四七右)

○豈<sup>アニ</sup>一<sup>ニ</sup>聖<sup>ト</sup>之<sup>ノ</sup>説<sup>ス</sup>有<sup>オヤ</sup>兩<sup>ト</sup>判<sup>ト</sup>之<sup>ノ</sup>失<sup>ト</sup> (五ノ四九右)

但しこの場合「ヲヤ」と通常とほり用ゐた例もこの書を通じて右と同數位ある。

(ハ) 「ヲバ」の場合。

○彌陀妙果 號曰涅槃 (四ノ三二右)

○禮云左道亂群 殺之 (六ノ三五右)

○身毛孔中 血流眼中 血出者 (五ノ一六左)

○眼中 血淚出 者名下品懺悔 (五ノ一六左)

右の中、最後の二例は初め「ヲハ」と書きて之を塗り消して「オハ」と改めたる跡あり。之らから見てもこの用法は程餘意識的であつたことが判る。

この書に於てはこの種の用例は右の「ヲカ」「ヲヤ」「ヲバ」の三語に過ぎなく、その他の語は用ゐられてないので判らないが、右の三語に就て拾ふならば右に擧げた以外に尙多くこの用例はある。その中最も多く出て来るのは「オカ」である。この他に尙「三帖和讃」には「ヲモ」「ヲゾ」等の用例が見えてゐる。即ち、

○心行イカテカサトラマシ

シムオモキヤウオモイカテカシラマシトナリ (高賛左訓)

○横ニアタオソオコシケル (末讃)

○無上覺オソサトリケル (同右)

勿論この『教行信證』の中にも多少の例外はあるとしてもその大部分は上に擧げた如く、「オカ」「オヤ」「オバ」である。然るに之が助辭「ヲ」の下に「シテ」等の助辭が続いて「ヲシテ」と「ワ」行の「ヲ」であつて決して「ア」行の「オ」となる例がない。されば之は「ヲバ」「ヲカ」「ヲヤ」或は「ヲモ」「ヲゾ」に限つての用例

親鸞聖人の假名遣に就て(藤谷一海)



であつてその他の用例はないのである。

以上は阪東本『教行信證』に於ける假名遣用例の一般である。勿論上に挙げ來つたそれら用語例も『教行信證』のいかなる場合でも斯くあると云ふのではない。二三特殊の語を除けばこれらの例に引いた語が一般歴史的假名遣に従つてある場合も勿論あるのである。

偕て斯うした假名遣の混亂が當時一般時代的傾向であることは、屢々繰返して述べたところであるが、その事の誤りならぬことをさきに『假名聖教用語の研究』に於て

平康 經 (1) 寶物集 一卷本 (宮内省圖書寮本)

鴨長 明 (2) 方丈記 大福光寺本

慈鎮 和尙 (3) 愚管抄 (國史大系本)

藤原 教長 (4) 古今集註 仁治二年書寫本

等に就て略々検討し得たことであつたが、然らば『假名聖教』の假名遣は單に時代の影響のみであつたかを更に検討して、上に挙げたる『寶物集』等が單にその傾向のみに止つて一定してゐないのに反して『假名聖教』に於ては、

スナワチ マイル マフス イエドモ ユヘ、

及び「オバ」「オゾ」「オヤ」等の一連は例外なく殆ど一定して用ゐてゐられるものであつて、これらは聖人の殆ど確定的な假名遣とも云ふべく、就中「オバ」「オゾ」「オヤ」等の用例は古今集の『清輔本』と聖覺の『唯信抄』との他に全

くその例なく、之は聖人の獨自の假名遣とも云ふべきものなることを述べた。この事はこの「教行信證」に於ても殆ど同一であつて餘り「假名聖教」の場合と大差がない。但しそれらの中、この書に於ては唯「ヤ」のみは「チャ」と用ゐたものと「オヤ」と用ゐたものと略々半することは上に述べた次第であるが、それが御晩年の「假名聖教」に於てはこの一連の助辭は殆ど一定してア行の「オ」を用ゐられて全く確定的になつて行つたのである。

註。(1) 著者の自筆とも傳へ、若し然らずとするも著作後間もなく寫しとられたもの、即ち鎌倉の末期を降らぬものとせらる。

(3) 『國史大系』中に收むるものは『史籍集覽』本をも校異してあつて、その假名遣及び異體假名等より見るも前二者に亞い十分價值のあるもの。

(4) 治承元年教長の口説を仁治二年に書寫したるものでその眞本を京都帝大文學部に藏す。

而して藤原清輔(一一七七「治承元年」)が小野皇太后(後冷泉帝后、藤原道教女歡子)の許にあつた『古今集』の眞之自筆本の傳寫に據つて自ら寫したと云ふ所謂「清輔本」の下卷には「オバ」「オゾ」「オヤ」等の用例は澤山あるが、これは單獨助辭の「ヲ」「オ」を用ゐた例が澤山あり、それに引きつけられて當然複合助辭に「オバ」「オゾ」等が出て來たものであつて、かの聖人の單獨助辭には必らず「ヲ」を用ゐてゐられる場合とは全く異なる。

残るは聖人眞蹟の『唯信抄』である。これも聖人が自分の假名遣を以て聖覺のものを寫してゆかれたとすればそれまでであるが、而し聖人の御性格として始めから斯ることを成さぬことは、かの『西方指南鈔』の例でも知られる。『西方指南鈔』を寫されたのは康元々年秋から翌年正月へかけてであつて、聖人八十四五歳のときである。即ちそれには聖人は一應そのまゝ寫して後から朱筆もて御自分の假名遣の如く「オバ」「オゾ」等と訂してゐられると云ふ。これを以て見ても聖覺の如き殊に私淑してゐられる人のものを始めから御自分の假名遣で寫されないだらうことは

略々推知せられる。然るにその書寫の『唯信抄』に例の「オバ」「オゾ」等が出て来る、こゝに聖人の假名遣は聖覺から出てゐるかどうかが問題になる。

偕て吉澤博士は、かの八十五歳校了の奥書ある『西方指南鈔』に朱もて「ヲバ」「ヲゾ」等が「オバ」「オゾ」等訂してあることより、聖人が假名遣と云ふものに注意せられるやうになつたは、その晩年八十四五歳からであらうと云はれた（龍大論叢。國語國文の研究）然るに私は『假名聖教』の中、

建長二歲庚戌十月十六日

愚禿親鸞七十歲書之

の奥書ある眞蹟『一念多念文意』に據るに前の假名遣が一定して用ゐてあるところよりすでにこの項より假名遣に於て聖人は意識的でなかつたとは云へないと『假名聖教用語の研究』の際述べた。然るに今や五十二歳作の『教行信證』を拜見するに及んで、上に舉げた如く、すでに一定の用法ある以上、更にこの事をこの年次まで繰り上げねばならぬことになつた。

偕て聖覺の『唯信抄』を聖人が書寫せられた眞蹟が現在三本ある。その一は大谷派本願寺本、その一は本派本願寺本、今一つは専修寺本である。何れも「草本云（又は曰）」として、

承久三歲仲秋中旬第四日安居院法印聖覺作

と云ふ奥記までは見えてゐるが、正しく書寫年次のその奥に、

寛喜二歲仲夏下旬第五日（以）彼草本眞筆愚禿親鸞書寫之

と見えてゐるのは専修寺本のみで、前二者は判然せぬ。

この寛喜二歳書寫の專修寺本に就て吉澤博士の調査に依れば例の「ヲバ」「ヲヅ」「ヲヤ」等の場合「ア」行の「オ」が一定して用ゐられてゐると云ふ。この事から博士も、聖人の假名遣は恐らく聖覺に依られたとせねばなるまいと云ふてゐられるのである。然るに、かの寛喜二年よりも六年前即ち元仁元年に著はされた聖人の眞蹟中に上に挙げたる如き、すでに「オバ」「オゾ」「オヤ」等の假名遣がしてあるのである。私は唯この事實を以て聖覺の假名遣が聖人の上に全く影響がなかつたと云ふものでは勿論ないが、聖人の假名遣がかの「唯信抄」のそれに依つてであると、博士と共に主張した曩の私の所論はひどくその根據を弱められたことになる。

何となればかの『唯信抄』の草本の成つた承久三歳は『教行信證』の製作に先だつこと僅かに三年なれば、交通文化の遲滞であつた當時それ程この『唯信抄』の假名遣が、影響を聖人の『教行信證』の上に與へたとは思はれないのである。

これ阪東本『教行信證』の假名遣研究が曩の「假名聖教用語の研究」の上に投けた一つの新しい指示である。

之を要するに、親鸞聖人の假名遣はその五十二歳の御草稿本『教行信證』に於けるものも、その後三十年を経て御晩年八十歳前後の『假名聖教』に於けるものも、そこに大した相違は見られなくて、

スナワチ マイル マフス イエドモ ユヘ

及び複合助辭のオカ、オヤ、オバ、オゾ、オモ等は常に殆ど一定して用ゐてゐられるのである。

その他の語に於ても『教行信證』の假名遣は、曩に「假名聖教用語の研究」の終りに附した聖人の假名遣表とも略

一致するのである。

さればかの「假名遣表」は大體聖人の假名遣と見て差支へないのである。

而してこれらの假名遣に直接聖覺の影響があつたか否かは俄かに斷言出来ないが、尠くとも聖覺と同じ傾向が多分にあることまでは認められる。